

A 2005
5
22
P 34

難病治療めざし出産

母2人 兄妹に骨髄移植へ

ベルギー

【ブリュッセル11日路透電】重い血液の病気にかかった自分の子どもに、適合する骨髄などを提供するため、2人の母親が今年1月、弟や妹にあたる子どもをブリュッセルの病院で出産した。ブリュッセル自由大学が19日発表した。受精卵診断によって、移植可能な白血球の型（HLA）を持つ受精卵を選んで母体に戻した。こうした治療は米国で例があるが、欧州では初めて。移植以外に治療法がない患者を救う手段だが、倫理上の疑問も指摘されている。

受精卵診断で選別

同大によると、生まれの兄や姉には、今回生まれた子どもは現在、ベルギーで採られた新生児のへその緒から採取した血液（臍帯血）の幹細胞を移植する。経過を見て、新生児から骨髄移植も検討する。

臍帯血や骨髄の移植では、患者と提供者のHLAがある程度一致することが必要だ。非血縁者ではなかなか一致しないという。

め、体外受精で得られた受精卵から一致するものを選んで母体に戻した。この方法で、これまで4人が妊娠し、2人が出産、1人は妊娠中。1人は流産した。このほか14組のカップルの治療に着手し、61組が順番待ちをしているという。

ベルギーでは、この治療に法的な問題は無い。だが、地元には「新生児を治療のための道具とすることにつながる」と疑問視する声もある。これに対し、担当の下ウプルイ教授は「倫理問題を含め、1年間検討した。新生児の兄妹には他に治療法がなく、命を救うことを最優先した。新生児が成長した時、早めに本人にきちんと説明してほしい」と話している。同じような治療は、00年ごろから米シカゴの研究が実施している。

「生命を選別」

日本では批判

日本では、こうした治療は行われていない。受精卵診断についても「生命の選別につながる」となるとの批判があり、日本産科婦人科学会は、子どもが重い遺伝病になる可能性がある場合に限ってしか認めていない。慶応大が申請したデュシエン又型筋ジストロフィーを対象にした診断が昨年7月、初めて承認された。

ユネスコ委も倫理上勧めず

ユネスコ・科学技術文明研究所長の話 米国ではシカゴのグループなどで実施例がある。今回のブリュッセル自由大学はシカゴグループと提携しており、欧州における技術供給拠点とするのだから、多くの欧州諸国では現在、遺伝病を回避するための受精卵診断を限定的に認め、それ以外の目的での実施は議論が進められているところだ。ただ、年上の子どもへの提供者とするためだけに実施するのは、ユネスコの委員会でも倫理的に勧められないとしている。